

## 永観の著作から見た臨終行儀

舎 奈 田 智 宏

永観（一〇三三～一一二一）は平安時代後期の僧侶であり、時代的には源信と法然とそのちょうど中間に位置する。三論の碩学として知られ、東大寺別当職を務めるほどの人物であるが、京都禅林寺を中心に見返りの弥陀の逸話が伝わるように念仏行に勤しみ、往生講を開き、多くの人々に念仏行を広めた人物であり、社会事業も積極的に行つたことで知られている。また『往生拾因』、『往生講式』といった、平安後期往生思想を代表する著作があり、臨終行儀にも関心があつたと思われる。現存する永観の著作においては臨終行儀についての記述は少ないが、今回は永観の著作の中でも臨終行儀について比較的まとまつており、ほぼ唯一の資料である『往生拾因』第十随順本願を中心<sup>(1)</sup>に永観が臨終行儀についていかなる考えを持っていたのか、検証を加えてみたい。

『往生拾因』第十随順本願では、まず每晚眠りにつく際に臨終を思い、十念を称えるように説いている。次に『大智度論』を引用した後<sup>(2)</sup>に臨終の重要性を述べ、仏前を花や香で荘

嚴し念仏を称えることを説いている。さらに続けて法智、雄俊といった人々の説話を挙げ、彼等のような畜生を殺すことを生業としたり、還俗し軍に入った者ですら臨終の念仏によつて往生することができたということを根拠として、臨終の念仏の重要性を強く打ち出している。そして彼らのような者でさえ極楽に生ずることができたのだから、我等がなぜ往生できないと疑うことがあるのかといひ、弥陀の願は虚しいものではないのだから、仰信して往生の意をなすようにと述べている。

これに続いて、具体的な臨終の作法が記されている。まず病人を看病する者への戒めとして酒や肉、そして大蒜や葱、韭といった五辛（五葷）を食することを戒めると共に、病人の排泄物を厭うことのないように述べている。また看病人が、病人の周りで世間話をせず<sup>(3)</sup>に往生に関する話をするよう説かれる。ここに説かれる内容だが、花を散じて香を焚くこと、続く酒、肉、五辛を禁ずる内容は、先駆する『四分律行事鈔』、

『観念法門』、『往生要集』などの内容に沿ったものと考えられ、特に『往生要集』の影響が大きいと考えられる。これらの作法は、日本における臨終行儀について記された多くの書物に記されるものであり、永観も臨終の作法として同様に重視していたことが見て取れる。

続いて病人に対して善智識が勧進を行うべきことを説くが、その内容は、行者の本意、さらに病人の気力に随って行うべきであるとする。さらに永観は音楽や歌頌を用いることや、合殺などの声明を誦することを勧め、それによって病人に勇猛心を発さしめることを説いている。ここにある音楽を奏であるという行儀は、『往生要集』には説かれていないが、往生伝の一つである『日本往生極楽記』には往生に備えて音楽を演奏する記述があり、それに準じたもの、もしくは当時の行われていた行儀の様式を永観が取り入れたものであると思われる。

さらに永観は、病者それぞれにあった行を行うべきことを説いている。観想行を行うことができる者には観想行を、出来ない者には南無阿弥陀仏と称える称名念仏を勧めている。そしてその根拠を『日本往生極楽記』延暦寺楞嚴院十禪師尋静の項目に説かれる、観念を修する者には観念を妨げるので(5)その他の行を勧めてはならないとしている箇所を求める。さらに永観は、臨終時に行者が称名念仏行を行うことが不可能

になった場合、「往生の思い」を一心に作すだけでも往生することができると説く。この部分は、『往生要集』にその引用はなく、『往生要集』の影響を多分に受けたであろう永観の臨終行儀における一つの特色であるといえる。この根拠として『安楽集』中に引用された『法鼓経』の一文を永観は用いるが、後に湛秀も『臨終行儀注記』において用いており、永観の影響が指摘されている。また、この内容は、『往生拾因』第八因三昧発得に説かれる地想観とも共通するものがあると思われる。

ただしこの「往生の思い」が、そのまま第八因に説かれた地想観であるかどうかははっきりしない。しかしこれらの文から、永観は病になった時や臨終時に、称名念仏よりも易行な方便行として、地想観や「往生の思い」といった観想念仏的な行を行なうべきと捉えていたと考えられる。

そして最後に臨終の際に仏が来迎する様子が説かれる。ここでは臨終の際に楽音が聞こえ、異香が香り、西方に紫雲があらわれ、弥陀、観音、勢至といった聖衆が来迎することが説かれる。

以上が『往生拾因』に説かれる臨終に関連する行儀の内容である。ただし、「具注別紙。可読之。」という一文があることから、現存しない永観の著作等に、永観自身の考える独自の臨終行儀の作法や思想が著されていた可能性を指摘するこ

とはできる。内容として想定できるのは、より細かな臨終の作法や、永観が行っていたとされる真言密教の陀羅尼読誦などの行法である。

次に、伝記から永観自身の臨終の様子を検証したい。『拾遺往生伝』<sup>(9)</sup>を見ると、永観は臨終の間際、沐浴して身を清め、頭を北に向け顔を西に向けた状態となり、最後には称名念仏すらできなくなりながらも、心の中で念仏行をおこなっていたということが読み取れる。ここで注目すべき点は、晩年から死の直前、称名念仏すらできなくなった際に、心の中で念仏行をおこなっていたという部分である。これは先ほど検討した『往生捨因』の第十随順本願にある、病床において称名念仏が出来なくなった者は、心に「往生の思い」をなすように述べている一文、さらに第八因に説かれる地想観を考慮すれば、称名念仏ができなくなった永観が、自らの著作で述べたように、心の中で何かしらの念仏行を行っていたことを示すものである。

永観の臨終が、『往生捨因』において実際に著わした内容と一致し、著作に記した内容を永観が実践していたことが見て取れる。

最後に永観の臨終行儀についてまとめるならば以下のような点が指摘できる。

まず内容から『四分律行事鈔』、『観念法門』、『往生要集』

などを参照している。特に『往生要集』の影響は大きいと考えられ、永観の臨終行儀の基本的な部分は『往生要集』を踏襲したものであろうと考えられる。

それと同時に幾つかの点で『往生要集』には見られない、独自の作法が見受けられる。即ち①音楽や歌頌、声明を流し唱える。②称名念仏が出来なくなった者に対して、観想念仏である地想観や、心の中で「往生の思い」をなすという心の中で弥陀の名号を念じたりさらには極楽往生を願うだけでも往生できると読み取れるような行を勧めている。これらの点が挙げられる。

特に後者に関しては、永観自身が死の直前、称名念仏が出来なくなつてから何らかの観想行を行っている。これは著作の内容と著者の行が一致していたことを確認できる稀有な例である。称名念仏が出来なくなつてからの観想念仏的な行は、永観の臨終行儀における特徴的な部分であるということができる。

結果的には、記述の少なさから十分な検証ができたとは言えない点もあるが、永観が臨終行儀に関心を持ち、いかなる作法をすればより確実に極楽浄土に往生できるかを考えていたのか、その一端を明らかにすることができたといえる。

1 『浄土宗全書』十五卷三九二頁上―三九三頁下。

2 『大正蔵』 八四卷六九頁上、中。  
3 齊藤雅恵『密教における臨終行儀の展開』三八頁。ノンブル社。二〇〇八。

4 『大日本仏教全書』一〇七卷七頁上。

5 『大日本仏教全書』一〇七卷九頁下。

6 『続浄土宗全書』十五卷三一―一頁下。

7 大谷旭雄『法然浄土教とその周縁』乾二三―八頁。山喜房仏書林。二〇〇七。

8 『浄土宗全書』十五卷三八―六頁上下。

9 『大日本仏教全書』一〇七卷八五頁下―八七頁下。

〈キーワード〉 永観、臨終行儀、『往生拾因』、念仏

(大正大学総合佛教研究所研究員・博士(仏教学))

掲載されなかった諸氏の発表題目(二)

三昧と華嚴の世界の関係について

権 坦俊(金剛大學校仏教文化学部教授)

『華嚴十玄義私記』に引用されている日本初見の中国華嚴文献について

金 天鶴(金剛大學校仏教文化研究所所長)

『華嚴経』十悪品について

— 李盛鐸旧蔵本と石仏寺碑との校合を中心に —  
坂上 雅翁(関西国際大学教授)

永観の著作から見た臨終行儀(舎奈田)